北九州市立大学法政論集第37巻第４号（2010年３月）

研究ノート

国際理解教育促進のための大学一年次における海外スタディ・ツアーの重要性とその効果

―韓国・プサンへのスタディ・ツアーの取り組みを事例にして―

三　宅　博　之

目次

はじめに
第１章　韓国を対象にした様々なスタディ・ツアー
第２章　韓国・プサンでの国立海洋大学生との交流を中心とした北九州市立大学三宅ゼミのスタディ・ツアーの目的とその内容
第３章　スタディ・ツアーを通しての大学生の国際理解能力の向上～アンケート調査結果から
第４章　考察
結びにかえて

はじめに

小泉政権時代、小泉首相自らがテレビの広報番組に出て、「Yokoso! Japan」のスローガンを携え、日本への旅行を外国人にPRしていた。さらに、政権交代後の民主党は年間訪日外国人数を2000万人を目標に掲げ、国内の観光資源の開拓や諸施設の整備を急ごうとしている。その結果、今

後、日本を訪れる外国人は多くなると予想される。

同時に、日本人の海外旅行者も多くなっており、今後、旅行自体のその質が問われようとしている。中でも、大学などの教育機関やNGOが取り組む旅行にスタディ・ツアーがある。スタディ・ツアーは、今世紀になって国連大学やユネスコが提唱しているESD（Education for Sustainable Development＝持続可能な開発のための教育）の主旨に近い。ESDの中には国際理解教育も含まれる。

本稿は様々な大学で行われている国際理解教育の視点から、北九州市立大学三宅ゼミ１年生を対象に2009年９月６日～８日に実施した韓国へのスタディ・ツアーの内容を紹介し、評価・考察を試みたものである。なぜ、北九州市が韓国との交流に力を入れる必要があるのかの理由も記した。

本稿の構成は、第１章で他大学での類似の取り組みを紹介し、今回の本ゼミの取り組みの教育上の有効性を垣間見た上で、第２章ではスタディ・ツアーの内容紹介を、第３章では参加大学生に対して行ったアンケート結果を紹介し、第４章で国際理解教育の独自目標からみて、今回のスタディ・ツアーはどの程度目標を達成できたのかについて考察した。

第１章　韓国を対象にした様々なスタディ・ツアー

韓国は日本にも近く、また、先進国ということで数多くの日本人が韓国を訪れている。最近は年間300万人弱の日本人が訪れている。一般的な観光旅行はソウルを中心としたパッケージ・ツアー企画やプサンを中心としたものである(1)。インチョン国際空港は日本全国の主要な空港から韓国の航空会社の便があり、また、ソウルの中心地に近い金浦空港へは羽田空港からの便がある。プサンへは博多港や下関港、大阪からの船便がある。訪問の目的は様々であり、一般には韓国料理、美容、ショッピングや韓流ドラマロケ地訪問などが目的の大半を占めている。

これらの一般的な観光旅行とは別に、学習を目的としたスタディ・ツアーも徐々に見られるようになってきた。ここでは日本の二つの大学のゼミが

実施しているので、それを紹介したい。

1．東京国際大学下羽友衛ゼミ

ひとつ目は、東京国際大学下羽ゼミである。国際関係が専攻で平和学や環境教育、開発教育といった分野にも広がっている。同ゼミは、理論学習、現場研修と情報発信といった三つの活動を狙いとして、非常に活発かつ積極的にゼミ活動を展開している。韓国へのスタディ・ツアーに関しては1995年から開始している。姉妹校である慶熙（キョンヒ）大学の学生との交流を行っている。日韓の歴史認識に関する議論、ホームステイを通しての日韓の違いや韓国の文化を知ることになったという。2002年には再度、同大学の学生との歴史認識に関する議論を行っている。その際、議論を通して日韓の溝が広がり深まったとの感想が双方の学生から出されたという。

そこで、それ以降はGCS（地球村分かち合い運動）の学生組織（GSU）を新しいパートナーとして再出発している。以前行っていた歴史認識や日韓間の政治的な問題の議論は避け、双方が同じ目的を持って一つの問題を解決していく上で友好関係を構築するという未来志向型の交流に転換している。貧困と環境、貧困とODA、貧困と紛争、貧困と人権の４グループに分かれ、日韓が協力してこれらの問題をどう解決できるかの共同宣言文を出している。2006年には、下羽ゼミ所属の韓国人留学生の人脈を活かして、歴史を学ぶことを目的に、板門店（パンムンジョム）、独立記念館、戦争記念館、西大門刑務所や景福宮を訪問し、ウリ党の学生団体と交流している。(2)

2．横浜市立大学東田啓作ゼミ

国際経済を専攻する同ゼミは2008年11月５日～８日までの４日間、啓明大学と合同ゼミを行うと同時に、異文化交流を行っている。合同ゼミでは、企業研究組とCSR研究組に分かれ、それぞれ発表、議論をしている。

まず、企業研究組では、発表内容を４つ（イントロダクション・日韓文化比較、日本の労務管理体制、マーケティング戦略の違い、立地条件・まとめ）に分けている。イントロダクションでは、日韓の価値観や思想の違いに言及、「働き方」や「利益に対するとらえ方」の違いを紹介、日韓の企業経営の違いを説明するための前段階と位置付けている。日韓の労務管理体制では、日本の基本的な労務管理システムにふれた後、終身雇用制、年功序列制を紹介・考察している。事例としてトヨタ自動車の「ジャスト・イン・タイム」、ソニーの人材育成策・職場環境改善策について説明している。次のマーケティング戦力では日本の経営戦略、技術開発力やブランド力の高さを紹介、トヨタ独自の生産プロセス、レクサスに見られる海外マーケットでの勢力の強さの説明を行っている。他方、韓国の学生からはヒュンダイ自動車とサムスン電子を事例に強みが紹介されている。最後の立地条件では、中国へのマーケット拡大を前提に、立地選択の成否についてグラフを用いての説明がなされ、進出先への投資規模の適切性に関して議論が展開されたとのことである。

別のCSR研究組の場合、４つのパート（CSRとは何か、社会的貢献面におけるCSR、環境管理面におけるCSR、労働面におけるCSR）に分け、発表を行っている。企業の社会的責任を意味するCSRの起源、何を行い、なぜ行のか、さらにその重要な理由とは何かが説明されている。その後、社会的貢献面におけるCSRの説明では、企業が大学に無料講習を開き、文化的活動やボランティア活動に投資を行い、企業のイメージを高める。次に環境管理面では、具体的なものとしてISO14001が取り上げられ、また、日本のいくつかの企業方針として大手電機メーカーが積極的に環境問題に取り組んでいることの事例紹介がなされている。最後の労働面では、企業が労働者への保証を意味し、労働環境面ではSA8000が採用される必要性が述べられている。

発表後に議論が交わされ、終了後には、韓国の大手金属部品加工会社の工場見学を行い、現場の労働者からの聞き取り、企業の映像を見ることで韓国企業に対して理解を深めたということである。その後には、慶州（キョ

ンジュ）を訪れ、世界遺産に登録されている仏国寺を見学することで歴史の勉強を少しでも行っている。(3)

以上、二つの大学のゼミによる韓国へのスタディ・ツアーを紹介したが、その特徴は韓国を専門に学習しているわけでもないのに、共通の議題に沿って日韓の事例の違いや認識の違いを述べあうということであった。その際には、相手にある程度の理解を示す必要がある。そうでなければ、下羽ゼミが経験したように関係が気まずくなるということも考えられる。さらに、双方、合同や協力して一つの目標を達成する意気込みがみられるという点である。このことは非常に重要であり、単に双方の共通点や相違点を理解するだけなく、さらに一歩前進して同じゴールを追求することに一体感が出てくると考えられる。

第２章　韓国・プサンでの国立海洋大学生との交流を中心とした北九州市立大学三宅ゼミのスタディ・ツアーの目的とその内容

１．スタディ・ツアー企画の経緯とその目的

本学大学案内やシラバスでは、三宅ゼミの教育分野は環境教育と国際協力となっている。(4)政策科学科は１年次から「政策入門演習」という授業科目があり、その中で大学での一般的な学習態度や方法、政策関連知識の習得と同時に、さらに可能であれば各担当教員の専門領域に関する学習を行うことができる。同ゼミでは、１年次の早い時期に国際感覚を少しでも身に付けることをモットーに、韓国プサンへのスタディ・ツアー、特に現地の大学生との交流を中心にツアー企画を実施している。そこで、どうしてプサンか？といった疑問が発生してくるが、その理由は、端的に言えば、本学が位置する北九州市がプサンに距離的に近く、それゆえ、交通費があまりかからないといった東京や大阪に比べての比較優位性によるものである。

実際、プサン広域市と北九州市間の距離は200km強であり、博多港からは高速艇で３時間弱、フェリーの利用で５時間半であり、片や下関港からはフェリーで一晩をついやす。ただし、プサン－下関間の関釜フェリーが一晩費やす理由は双方の税関の作業開始時間の都合上のことであり、したがって、時間調整のためにプサンや下関沖に長時間停泊している。費用は、高速艇で往復２万円、フェリーでは１万6000円程度であるが、旅行代理店のパック・ツアーを使えば、フェリーの場合一万円前後（現地ホテル１泊）となる。したがって、この費用だと近県でのゼミ合宿と同じ程度であり、海外旅行が高いというイメージは全くない。ちなみに、東京からは航空機を利用しなければならないため、格安航空券を利用したとしても１万円ということはない。さらに、国際交流という視点からすれば、日本の大学生が日本から韓国を訪れることだけでなく、交流相手である韓国の大学生がスタディ・ツアーとして日本を訪れるということは非常に重要である。この場合、韓国の大学生がどの程度まで渡航費用の捻出が可能かが問われてくる。通常、韓国の大学生は日本の大学生とは異なり授業期間中はアルバイトを控えているため、経済的な余裕はあまりない。したがって、安い渡航費用に依拠するようになる。

このように、双方の国の大学生にとって北九州市とプサンの国際交流がいかに容易であるかが理解できる。したがって、そのような機会を作る努力がなされ、実施される必要がある。

実際、企画段階になると、スタディ・ツアー、特に交流を目的としているので、受け入れの大学を探さなければならず、候補としてプサンの国立海洋大学国際学部東アジア学科があがった。これは偶然の産物であり、キム・ジュンハ教授が日本語が堪能で韓国や日本の（海洋）地域観光の研究をされていることを切っ掛けに交流の話が進んでいった。特に、韓国の場合、教員は研究業績が査定の対象になるため、時間を要する実践的教育に自らの時間を割く教員は少ないといった韓国独特の事情があり、日本側の大学が交流の意図を持っていたとしても一方通行の交流になる危険性もある。

国立海洋大学は元来は船員を育成する大学であったが、学部を徐々に増やし、国際学部も新しく創設された。東アジア学科では韓国、日本と中国を主に学習することが中心に据えられカリキュラムが組まれている。韓国にはゼミといった少人数で行う学生主体の授業方法がないということなので、キム教授が担当している科目の授業を利用する形でセミナーを企画してもらった。

今回のスタディ・ツアーの目的は、＊日本に最も近い外国である韓国の様々な事情を、自分の５官（感）を使うことで、韓国の同世代との交流を通じて理解する、＊英語の能力を向上させる、＊グループ・ワークという共同作業を通じて協調の意義・必要性を学ぶであった。

２．スタディ・ツアーの内容

スタディ・ツアーとは言え、１年生が対象なので、可能な限り、費用を低く設定したために、JR九州の高速艇ビートルを利用した、韓国ではすべて自由時間というパッケージ・ツアー企画に参加した。２泊３日の旅である。一日目の到着日、午後と夜は海洋大学生とのグループ・ワークである。海洋大学の大学生は日本語を専攻している者もいると言っても、一年生なので、そこまで流暢には喋られない。したがって、双方は英語を駆使してコミュニケーションを図らなければならない。午後は、グループごとにホテル近くにあるナムポドンやクァンボクドンという繁華街を歩き、屋台でスナック類を食べたり、その後、それぞれのグループで夕食をとる。夕食はサムゲタン、焼き肉などであった。その間に、喫茶店で日常的な話をしながらも、セミナーでの発表の準備をする。ホテルに帰ってきた後は、各グループで本格的なセミナーの準備をする。

セミナーのテーマはと言えば、諸事項の日韓比較である。具体的には、恋愛・結婚事情、大学生のアルバイト事情、国技（相撲とシルム）、ヘアスタイル・ファッション、上下関係に見る礼儀やインターネット事情であった。双方一年生なので、専門についての学習はあまり行っていない。した

がって、テーマの選択は日本の学生に委ねた。選択されたテーマの特徴としては、特に、日常生活に見られる身近な事項を選んでいることである。事前に調べてきた自らの国の事情を述べる。その際、見やすいように大きな付箋紙を用いて、説明を試みている。その後、発表に使うパワーポイント資料を作成する。グループによっては、夜中までその作業が続いていた。

二日目の午後、海洋大学のキャンパス見学後、セミナーが始まった。最初に双方の大学の二人の学生司会者によって今回のセミナーの目的、進行手順が説明され(5)、次に、司会者によって、パワーポイントを用い、双方の市や大学の紹介がなされた。その後にセミナーの主要事項である日韓比較がグループごとの発表によって行われた。

（1）恋愛・結婚観について

恋愛・結婚観のうち、恋愛観では、共通点としてデートの場所や理想の男性に求めるもの、相違点としてはデートの頻度が日本では週２～３回に対して韓国では毎日、デート時の支払い方法が日本が男対女の割合が８対２に対して、韓国は７対３であった。好かれる女性のタイプとしては、日本が可愛い系の女性、韓国は綺麗系の女性であった。

結婚観では共通点は結婚率の低下、晩婚化（男性30歳、女性26～28歳）を指摘することができ、相違点は日本では婚前の同棲率が高く、韓国は低い。日本の場合の理由としては、相手の嫌な所を婚前に見つけること、他方、韓国の場合は世間体がその理由にあげられ、儒教と関わっているのではないかとの見解も出された。

（2）アルバイト事情

高校生・大学生のアルバイト事情では、日本の場合、高校生の４割、大学生の６割以上（した経験がある者を含めると９割）が、韓国では高校生：１割、大学生：３割がアルバイトをしており、日韓に大きな開きがあることが指摘された。大学進学率80％に達する韓国では受験戦争が厳しく、高校生はアルバイトをするより勉強を行い、少しでも有名な大学への進学を

志していること、また、大学生も有名な企業に入ろうとすれば、成績が評価基準になることから、アルバイトを控える傾向にある。

アルバイトの職種としては、日本の高校生の場合、コンビニやスーパーでの店員、大学生では塾講師や家庭教師、居酒屋の店員などであり、他方、韓国では高校生はコンビニやインターネットカフェ、大学生はそれらに加え、居酒屋の店員で、日本のように教育に携わっている者は少ないとのことであった。というのも、韓国では専門の教員が教えている場合が多いと言う。平均時給は、日本の高校生：810円、大学生：1,150円、韓国の高校生：300円、大学生：400円ということだった。アルバイトの主要な目的は、日韓とも同じで自らの小遣いのためだとされている。

（3）ヘアースタイルとファッション

次に、ヘアースタイルとファッションという大学生たちにとって非常に興味のある事項に移った。日本での男性のヘアースタイルの現在の流行は、ベリーショート、ウルフ、ボウズやツーブロックスの４種類であり、女性では1980年代には「聖子ちゃんカット」が流行していたが、現在はボブヘアーと呼ばれる短い髪形が流行であるという。同時に、髪の毛を染めている女性が多く、黒髪の女性は少数とされる。

他方、韓国での女性のヘアスタイルは髪にウェーブパーマをかける、前髪を切りそろえるなどが多く、日本とは異なり、髪の毛を染める女性は極力少ない。

ファッションの場合、日本では男性：紫色と緑色の服が人気で、シャツと同じ素材で作られたジャケットなど、きっちり感があるコーディネートしやすい服が、また、女性ではワンピースやスカートが流行しているが、ハイウエストではくスカートやくるぶしが隠れる程度の丈のマキシ丈スカートが人気という。女性らしい印象を与えるだけでなく、足を長く見せたり、ウエストを細く見せる効果があるという。韓国では、マリンルックとボーダーや碇・ヨットをモチーフをプリントした柄の服やスキニージーンズと呼ばれる肌にぴったりしたシルエットのジーンズが流行しているそうであ

る。

（４）座席の譲りと酒の席での上下関係を通しての礼儀

座席の譲りや酒の席などの事例を通して上下関係に見る礼儀での日韓の類似点と相違点が発表された。まず、類似点として、電車やバスの座席に関しては、優先席が空いていたら座り、最近では高齢者が乗って来ても席を譲らない若者がみられるということ、目上の人には敬語を使って会話すること、目上の人に挨拶する場合は座っていたならば立ち上がり、深々とお辞儀をすることなどであった。

相違点としては、お酒の席では日本は年長の人とのお酒の飲み方には特に決まりごとはないが、韓国では年長の人の方を向かずに少し横を向いて飲むこと、男性の場合は、酒をついでもらうときには特別なしぐさがあり、昔の服に由来しているとのことであった。食事の場合、日本では食べる順番は決まっていないが、韓国では年長者から食べ始める。

（５）国技である相撲とシルム

あまり学生たちの日常生活と関係のない事項として国技について学生たちは比較してもいた。日本の国技である相撲と韓国のシルムである。相撲は元来、宗教的な儀式と捉えられ、農業生産の吉凶を占う際の神事であるとされる。当初は行司がいなくて、現在の形態になったのは17世紀である。相撲は直径4.55ｍの円の中で行われ、その大相撲の回数は年６回、東京で３回、大阪１回、名古屋１回及び福岡１回となっている。土俵外に出たり、足の裏以外の身体が地面につけば負けになる。報酬面では、ボーナスもあり、横綱は月収280万円、大関：230万円と上位はかなり高給である。近年、外国人、特にモンゴル人の参入が顕著である一方、日本人力士の数は減少している。

他方、シルムは、上半身裸に半ズボンのようなものをはき、腰にサッパ（紐）を捲く。円形の砂場を競技場として競技時間は５分３本勝負で、お互いに組み合った状態から始める。相撲とは異なり、相手を競技場の外に

押し出しても勝ち負けはつかず、相手の膝から上部を地面につけた場合に勝ちとなる。審判はホイッスルを使用する。韓国でのこの国技は衰退傾向にある。韓国が欧米などの文化を取り入れる過程で伝統的なものを軽視する傾向が原因とも言われている。

各事項に関する発表が終了するたびに、質疑応答に入った。英語での発表には双方の大学生とも慣れていないせいで、英語で作成されたパワーポイントと資料を見せつつ、英語の原稿を棒読みするといったグループもあった。しかし、どのグループとも、日韓の学生がよく話し合ってまとめていたような印象を受けた。(6)

第３章　スタディ・ツアーを通しての大学生の国際理解能力の向上～アンケート調査結果から

本章は、前章で紹介したスタディ・ツアーが参加者にどのように認識されているか、さらにスタディ・ツアーが多感な世代にある大学生にどのような影響を与えたかを探るものである。アンケートは韓国からの帰国便である高速艇ビートルの中で参加者からとったものと３ヵ月後にとったものである。というのも、旅行直後は感動にいまだに浸っているので、記憶も鮮明であり、行動にしても様々なものにチャレンジしたいと思うのが常だからである。しかし、徐々に、再び、日常生活に慣れてくることで、モティベーションも下がることは否定できない。では、それぞれのアンケートの結果を示し、その分析を試みたい。

１．ツアー直後のアンケート（９月８日調査実施）結果（11人が対象、男：６人、女：５人）

（１）海外旅行の有無と韓国人との出会いについて

大学１年の９月に実施した本ツアー以前に外国旅行を経験している参加

者は 6 人で、内訳は、修学旅行が 4 人、語学研修 1 人と観光 1 人であり、訪問先は英語を国語とする国が 4 人、あとは中国と韓国であった。当地での英語を話す機会は 1 人を除いて全員の 5 人があったと答えている。

それでは、今回の目的地が韓国なので、韓国人に会い話したのは初めてかを尋ねてみたところ、初めてとの回答者が 8 人、初めてではないとの回答者が 3 人であった。後者に関して、会った時期と場所を尋ねたところ、2 人が大学、1 人が高校となっている。

以上、二つの質問に対する回答をまとめると、海外への旅行経験は半数以上があるものの、いずれの韓国人との面識はほとんどない。いわば、今回の旅が直接の韓国との初めての出会いとも言える。

（2）韓国へのスタディ・ツアーに対する期待

参加者に今回のツアーに対して何かを期待しているかとの質問に、全員が期待していると答えている。その内容を調べると（複数回答）、出会いが 9 人を占め、「友人を作ること」、「韓国の学生とより多くの会話をして交流を深めること」、なかには「かわいい人、きれいな人に出会えること」といった回答もある。さらには、会話や発表を通しての英語力の向上をあげている者が 2 人、「カルチャーショックを受ける」や「外国での体験で言葉の問題などに気づく」といった回答では苦境にあって自分自身を真摯に見つめなおす機会と位置付けている。あとは韓国料理のいろはを知るといった回答者が 2 人いた。

（3）韓国人大学生とのグループワークについて

上記の出会いや英会話の能力の向上といった目的を果たすのに、韓国人大学生とのグループワークは絶好の機会である。到着後、テーマごとに事前に分けておいた日韓の大学生二人ずつが各グループに分かれ、ホテル外で話し合い、夕食をとってもらう機会を与えた。まず、各グループでの使用言語であるが、英語のみとの回答が 1 人、英語が主で日本語が従との回答が 5 人、日本語が主で英語が従が 5 人、日本語のみは 0 人だった。前述

したように今回の交流相手は国際学部東アジア学科で日本や中国を専攻している学生で、いくら一年生といえども、日本語を勉強している学生も数多くおり、したがって、日本語を自ら話したい、さらには英語より日本語が上手との要因も手伝い、日本語を交えての会話になったものと思われる。セミナーは英語で発表するので、可能な限り、英語でコミュニケーションしてほしいと頼んでおいたのだが。

英語の実力について、自分が言いたい事がどこまで表現できたかの質問に対して、全くできなかったは０人、少しはできたが７人、ある程度できたが４人、完璧にできたは０人だった。日本にいる際にはほとんど英語でコミュニケーションをとる必要がないことを考えると、これらの回答からある程度の達成感が読み取れる。しかし、次の自身の英語の実力の発揮度合を尋ねた時、思ったより発揮できないが６人、能力どおりが４人、思ったより発揮できたが１人となり、半数以上はなぜうまくしゃべられなかったのかといった疑問と歯がゆさを感じている。その表れとして、「コミュニケーションとなると上手く文章が出てこず、英単語のみの表現になる」、「言いたい事が言えない」といったことがあげられる。夕食時間をも含めたグループワークでの話し合いの時間は２時間～３時間がほとんどであり、日本語を主にしていたグループは３時間以上話している。

（４）日韓大学生合同セミナーでの発表

グループワークの最終的な取り組みは合同セミナーでの英語での発表である。前日のグループワークでは日韓の大学生が夜遅くまでグループごとにホテルの部屋に閉じこもり、パワーポイント資料の作成に従事していた。合同セミナーの発表では一つの脱落グループも出ず、全グループが準備してきたパワーポイント資料を説明していた。

人前で、それも英語で発表することに慣れていない学生に対して発表の緊張度合を尋ねたところ、全くしなかったは２人、少しの緊張が５人、ある程度の緊張が３人、そしてかなり緊張したが１人であった。また、他のグループの発表を聞いていて、日韓の類似点・相違点がきちんと理解でき

たかといった質問に対しては、少しできたが２人、ある程度できたが７人、十分できたが２人であった。双方の大学生は、自国しか知らないのが一般的だが、このようにお互いが自国の事情を調べ、比較することで、その共通点や相違点が理解できるようになる。

（５）訪問前後の韓国のイメージの変化

スタディ・ツアーを評価するにあたって、訪問前後のイメージを把握することは非常に重要である。特に、交流は自分と他国の人間との関係の在り方が問われ、イメージに大きな影響を及ぼす。韓国に対する訪問前後のイメージに変化が生じたかといった質問に対して、７人が少し変わったと回答し、３人がかなり変わった、さらに１人はすべて変わったといった結果に見るように、直接現場に足を踏み入れることで意識の変化がかなりみられた。では、具体的にどのように変わったのかについては下記の表の通りである。

表１　韓国・韓国人に対する訪問前後のイメージの変化

	訪問以前のイメージ		訪問直後のイメージ
男子学生A	ガリ勉で頭が堅そう	→	とてもユーモアがあり、皆、フレンドリーでいい感じ
男子学生B	メディアに見られるような反日のイメージがする	→	韓国人の人柄はとてもよい
男子学生C	街がきれいな感じ	→	日本の街の方がきれい
男子学生D	日本嫌い	→	若い人は気さくだったが、高齢者で一部の人はきつい人が多かった
男子学生E	大学生の皆が英語を堪能に話すことができる	→	英語より日本語が得意な人がいる
男子学生F	怖い、日本人が好きではない	→	優しい、フレンドリー
女子学生A	外国だから、あまり日本のドラマや歌手は知られていない	→	日本の歌、ドラマやアイドルのことをよく知っていた

女子学生B	勤勉、まじめである	→	カラオケで踊ったり、はしゃいだり、意外な一面を垣間見ることができた。でも、夏休みはアルバイトをせず、多くの時間を勉強に費やすぐらい根は真面目なのだと思う
女子学生C	誰にでもよく話す	→	思っていたより怖かった。バスやタクシ―の速度が速い
女子学生D	日本人嫌いで、意地悪そう	→	とても親日的だし、優しい人たちだった
女子学生E	日本とそれほど変わらない。日本語がしゃべることができる人が多い	→	嫌日家が見当たらなかった。皆、優しかった

出所　著者実施のアンケート調査（2009年９月８日）

学生たちの変化についてその特徴をあげてみたい。韓国訪問以前のイメージで驚くのは、韓国人が日本や日本人を嫌っている、または反日であると回答した人数が４人いることである。そこから派生して、韓国人は怖い、意地悪そうであるといったイメージを抱くに至っている。その嫌日や反日といったイメージは、学生Ｂが回答しているようにマスコミの報道の仕方にも一因がある(7)。肯定的に捉えた回答の内容は、勤勉・まじめ、誰にでも話すような気さくさ、日本語がしゃべることができる人が多い、英語の喋りが堪能といったことである。

他方、訪問直後の回答の特徴については否定的なイメージが一変しているということである。反日や嫌日のイメージを抱いていた学生は、直接韓国の学生に接するという行為を通じて、また、自分の周囲360°にいる韓国人を観察することで、親日的、優しかった、人柄はいい、気さくといったイメージを持つに至っている。また、日本の歌・ドラマ・アイドルのことを知っていたといった事実関係を新たに知りえた者もいる。ただし、これら二つの変化については、交流相手が東アジア学科で日本や中国などの東アジアを学ぶ学生であり、日本人や日本に非常に興味を持ち、積極的に関わりたいという学生であるという事実もきちんと把握しておく必要があ

る。[8]他方、否定的な認識としては、バスやタクシーの運転の乱暴さに怖がったり、日本の街の方がきれいだといった回答がその代表格である。

（6）韓国プサンで印象に残ったこと

プサンで印象に残ったことを2つ指摘してもらった。7人が交通関係の事柄に触れていた。具体的には、スピードを出し過ぎること、運転が荒いこと、ヘルメットをかぶっていない人もいること、路上駐車が多いこと、信号が少ないこと、クラクションをやたら鳴らしたがるなどがあげられる。

次に、日本語の看板が街のあちこちに掲げられているが（主に店の看板として)、その字が間違っていることを指摘している者が2人いた。宿泊したホテルの界隈は植民地期には日本人が多住していた場所であり、また、戦後、日本人観光客がよく宿泊していたこと（今でも格安のパッケージ・ツアーの宿泊地はこの地域である）から、日本語看板が多いのであろう。他には、建物と建物の間が狭いとか、階段が急、食堂での食事後ゆっくりくつろがずに席を立つ、カップルが強烈にいちゃついている、トイレット・ペーパーをトイレに流さないこととなって、これらの回答者はそれぞれ1人である。

2．訪問3ヵ月後のアンケート調査結果

訪問直後はまだ感情の高ぶりもあり、強烈に印象に残っているのは当然で、特にイメージが好転した場合、韓国への感情移入が激しくなる。その後、徐々に日本の日常生活に慣れてきて、印象や記憶が薄れていく。そのような一般状況の中で、2010年1月8日、3ヵ月経たこの間、学生たちにとって、認識・意識・行動にどのような変化が見られたのかの調査を、料理、言語学習、メディア、イメージ、その他といった項目別に行った。

まず、料理としては10人中7人が選んでいる。具体的にはホットク（韓国風ホットケーキに近い）を作ったり、韓国で購入した香辛料を使い料理をしたり、韓国ノリやキムチ鍋など韓国風料理をよく食べるようになった

りしている。次に言語学習も７人が選んでいる。具体的には、NHKの韓国語講座番組を見る、～ジュセヨ（～をください）という言葉を時々使ってみたりする、英語または韓国語の勉強をするようになったが代表的な事例である。

メディア（新聞・テレビ・DVDなど）を選んだのは６人であった。具体的には歌手の東方神起や韓流ドラマにはまっていたり、韓国での出来事がニュースに出るとつい関心を示してしまうようになったりしている。イメージについては８人が選び、前述したように、韓国人による反日のイメージがなくなり、肯定的なイメージに変わっていっている。その他は１人が選び、また韓国に行く予定を立てているとの回答だった。

このように見ると、スタディ・ツアーを通じて韓国に対してより深くなった関心が、韓国をもっと知ろう、生活の中にも取り入れようといった行動にまで発展してきていることが理解できる。大半の学生にそのことがあてはまる。

最後に、３ヵ月を経た現在、スタディ・ツアーで何を学ぶことができたのかを振り返って考えてもらった。その回答は以下の通りである（学生が記述した原文どおり）。

＊異文化交流。日本で当たり前だと思うことが通じない等のカルチャーショックを受け、世界の広さを痛感した。
＊大嫌いだった語学の大切さ
＊英語の大切さ。コミュニケーションの大切さ。交流することの楽しさ。
＊メディアだけでなく、その現場へ行って自分の眼で確かめる大切さ。語学または外国語を話す楽しさ。
＊言語に頼らなくてもコミュニケーションがとれるということ。日本だけではなく、海外にも視野を広げるということ。異文化を体験するのは楽しいということ。
＊国際交流で言語学習の意味を知ることができた。今までより物事を考えるための視野が広がったかも知れない。
＊伝えることの難しさと伝えようとする気持ちの大切さ。街とかも実際に

行ってみないとわからないと思った。

＊まず、韓国に行き、現地の人と接することで韓国人に対するイメージを大きく変えることができた。プサンは想像以上に（大きな）都市であり、発展途上国のようには思えなかった（著者注：韓国はOECD加盟国であり、途上国ではない)。タクシーやバスなど主に交通に関しては非常に荒く、恐怖だった。一番学べたことは他の言語の人たちとのコミュニケーション方法だと思う。

＊韓国の良さ、におい・雰囲気など行かなければわからないことを体験できた。また、外国人とのコミュニケーションの楽しさを学ぶことができた。

＊指示を待ってから動くのではなく、自主的に動くことを学んだ。また、韓国の学生が流暢に日本語を話しているのを聞いて自分も第二外国語を習得したいと思うようになった。

第４章　考察

以上、2009年９月６日から８日までの２泊３日の北九州市立大学三宅ゼミ１年生による韓国プサン・スタディツアー企画の目的・内容紹介及び学生に対するアンケート結果を報告してきたが、ここでは、結果的に、国際理解教育で掲げられている目標がどの程度まで達成されたかを検証していきたい。

まず、国際理解教育の目標とは何か、また、今回は訪問対象国を韓国に絞ったので、その際の理解の留意点は何かについて考えていきたい。国際理解教育に関しては、「国際理解」とは、国際社会のことや外国のことを理解することであると受け取られがちであるが、決してそれだけではない。実際、国際理解教育を推進している多くの学校では、例えば次のような能力や態度を育てることをねらいに設定している。＊わが国の文化と伝統を理解し、それらを大切にする（自国文化の理解)、＊外国の生活や文化に関心を持ち、理解するとともに、それらを尊重する（他国の異文化理解)、

＊自分と異なる生き方や考え方をする他者の存在を認め、それらを尊重する（人間理解、人権尊重）、＊自分の考えをはっきり持って表現し、互いに意思を通い合わせる（コミュニケーション能力）であると言われている。(9)

また、韓国を含むアジアの学習の留意点として大切にしたい学習内容は以下の３点との考えが示されている。すなわち、＊日本とアジア諸国との正しい歴史認識の涵養、＊アジアの人々の生活や文化の理解と尊重、＊蔑視と偏見、＊排外意識の克服である。(10)

これらを判断基準にして、今回のスタディツアーの取り組みを振り返ってみたい。その前に、学生たちのツアーに対する全般的な満足度結果について述べれば、５段階で測ってもらった（５段階が一番良い）ところ、４が５人で、５が６人であった（訪問直後アンケート結果）。さらに、３ヵ月後のアンケート調査で再度韓国やプサンを訪問したいかとの問いに９人は行きたい、１人は行きたくないとの回答であり、これらの結果を見る限り、旅行自体の持つ楽しさは理解してもらえたのではないかと思える。

まず、自国文化の理解については、今回のセミナーは日韓比較を行っており、日本側は日本の文化・習慣に関する知識・情報を事前に整理しているので、発表された事項に関する限り、自国文化はある程度理解されたと言ってもよい。ただし、今回は与えられた発表時間が非常に短かったので、深く掘り下げて調べる必要がなかった。次回はより長い事前調査期間が必要となろう。

他国の文化に対する理解については次のとおりである。今回の直接訪問という経験を通して観察を行ったり、グループワークの際に話し合ったり、また、セミナーでは韓国の学生から直接韓国の諸事項について聞いている。それゆえ、情報量はまだまだ少ないものの、文化理解はある程度達成できた。人間理解・人権理解については前述のアジアの学習の留意点である蔑視と偏見にも関連してくる。これらについては、訪問前は事実と異なる認識を有していた部分があったが、交流を通して誤った認識は払拭されたように思われる。

次のコミュニケーション能力については、グループワークでの使用言語

は英語と決めていたが、日本語に依拠しなければならない部分があったことは悔やまれる。最近は、センター試験の外国語科目（英語）にリスニングが導入され、プラクティス面での向上が図られているという。実際は、今回の事業でも理解できるように、学生たちの英語力はまだ実用レベルには達していない。卒業までの残された3年間にどこまでのレベルに持っていくか、参加学生は考える必要があるだろうし、授業料を受け取っている大学ももっと真剣にプラティス面の向上に取り組む必要に迫られている。ただし、セミナーでのプレゼンテーションを英語で行ったことや帰国後も韓国語や英語の学習（特にプラクティス）を行っていることを見ると、将来、参加学生の当該能力はもっと伸びるであろう。

最後に、日本とアジア諸国との正しい歴史認識の涵養については、歴史、特に植民地期の日韓関係の学習機会は、残念ながら、事前に配布した20ページほどの資料を通じてでしか提供されていない。それも、集団学習の場を持たず、個々人に読んでおくように指示しただけなので、どれぐらいの人数が読了したかはわからない。筆者自身、日本人が韓国に出かける際は最低限の植民地期の歴史（日韓関係史）を学習することで、なぜ韓国人が反日意識をあらわにするのかの理由をきちんと知っておく必要があると思っている。

結びにかえて

日本と韓国は非常に近いので、ヨーロッパで言えば、イギリスとフランス、スウェーデンとデンマークのような頻繁な交流があってもいいと考えられる。将来的には今よりさらに交易・交流が強まるだろう。それを見越して、北九州市や福岡市は比較優位性から先行者の役割を果たしていいというのが筆者の持論である。それを目的に、ESDの観点からプサンとの交流事業をゼミ単位で始めている。

事業内容は本文に書いた通りであり、また、国際理解教育の視点から見たその評価も記した通りで、参加学生の満足度は高く、また、目標も初級

レベルながらある程度達成していると考えられる。

しかし、ESDが教えているように、交流事業には継続性や持続可能性が問題になってくる。こういった単発的な旅行企画によく見られがちな落し穴である。スタディ・ツアーの一つとして中学校・高等学校レベルのツアーに修学旅行がある。一般に、修学旅行は短時間で行われるいわば「点」であり、これを真にみのりあるものとするためには、日常的な国際理解教育の実践、息の長い国際交流活動などの「線」的活動と一体化させていくことが望ましいと言われる(11)。それを実行するには、適切な教材を探し出し、日常的に韓国を学ぶ必要がある(12)。今回は１年生を対象としていたので、どちらかといえば、時間が限られた分、知識・情報量より意識変革や認識変化に主眼を置いた(13)。

注

（１） ソウル観光の一般的なパッケージ・ツアーの一例は次のようなものである。ソウル着後、石焼きビビンバの昼食、その後、北朝鮮の様子を垣間見ることが出来る統一展望台と自由の橋観光。その後、ソウル市内で有名ブランドも多数取り扱う免税店でのショッピング。夕食は韓国式すき焼きプルコギ。２日目は、朝食に牛骨スープ「ソルロンタン」を食べた後、ソウル市内観光で、まず、朝鮮王朝建国の際に正宮として建てられた景福宮、韓国の伝統的な生活文化を見ることのできる国立民俗博物館を見学し、その後に紫水晶店や免税店でのショッピング。午後１時半に繁華街である明洞（ミョンドン）で解散（フリータイム）。ちなみに、宿泊は明洞のホテルか地下鉄市庁駅近くのホテルである。３日目は、ホテル発後にキムチなどお土産に適した食材が揃う韓国食料品店に立ち寄り、空港に。阪急交通社の広告（2010年１月11日『朝日新聞』朝刊）より。

（２） http://www.tiu.ac.jp/seminar/shitabazemi/main/activity/04.html 2010年１月11日アクセス。

（３） http://www.yokohama-cu.ac.jp/campuslife/korea_fieldwork_2008.html 2010年１月９日アクセス。

（４） 2010年度用の『北九州市立大学案内』には、「法学部政策科学科にあって私

たちのゼミは環境教育と国際協力の視点から参加型・体験型授業方法を積極的に採用し、学外でも様々な企画を実施しています。インドネシアやバングラデシュといった途上国へのエコ・スタディ・ツアーもその一つです。2008年９月に訪れたインドネシアでは現地の大学との合同セミナーの開催、マングローの植林活動、悪臭漂う最終処分地で有価廃棄物回収体験、小学校での環境教育授業への参加などを行いました。卒業生には青年海外協力隊員や国際協力コンサルタントとして活躍している人もいます。」と書かれている。『北九州市立大学案内2010年度版』、11ページ。

（５） 司会者は進行上非常に重要な役割を負うので、上級生にしてもらった。日本側は３年生で１年の時に韓国トンヨンでのセミナーで英語で発表を行った経験を持った学生で、韓国側は２年生だった。

（６） 発表後の夜は、日韓の大学生が一緒になり、ナムポドンの焼き肉店で焼き肉を楽しんだ。無事に発表が終了した安堵感で、すべての学生が喜色満面となり、話をしていた。

（７） とはいえ、最近の報道は韓国旅行、中でもグルメ、ファッションや美容に関するものが多く、どちらかといえば、日本人がもっと韓国に興味を持ち、気楽に訪れるような構成の番組になっており、反日・嫌日的な内容はあまり出てきていないように思える。

（８） 参考として、国立海洋大学国際学部東アジア学科の合同セミナー参加学生に尋ねた同じ質問に対する回答は以下のようであった。

質問１．日本に対して持っていたイメージについて、日本人学生と直接会って話をしたあと、何か変化はありましたか？

回答　まったく変化はなかった：４人
少しぐらいは変化があった：５人
ある程度の変化はあった：３人
すべてにおいて変化があった：０人

１－２．日本に対してどのようなイメージを持っていましたか？

＊親切だけれども、自分の心の内を見せなさそうだ。

＊親切だけれども、韓国人や中国人に対しては不親切だ。

＊若者は流行に敏感だが、皆が同じ流行を追っているので画一的である。感謝や申し訳ないことに対して素直にその感情を言葉で表現する。

＊韓国人は自分たち（日本人）より劣っていると思っており、非常にプライドが高い民族である。

＊親切で礼儀が正しい。

＊すぐに親しくなることは容易。

＊少々は不親切で責任感がなく、利己的である。

＊とても恥ずかしがりやで、物静かである。

＊韓国とは違い、公と私が明確で、個人主義的である。

＊日本も韓国も皆同じ人だ。

＊親切。

＊自由奔放と謙遜のイメージ。

１－３.「変化はあった」との回答者に対して、どのような変化がありましたか？

＊日本人は自分の心を正直に表し、真摯に人に対応する。

＊消極的であると思ったが、意外に積極的でイメージが変わった。

＊過去に持っていた日本に対する盲目的な拒否感が減り、日本も韓国とは言語だけが違う人々が生きている社会だということを理解できた。

＊食事と会話を交わしながら、私たちと多くの点が類似していることを感じた。

＊すぐ親しくなることができてメールも交わすことができた。

＊日本人は自分に任された仕事に対する責任感が強く、他人に対して親切であった。利己的ではなかった。

＊日本の学生たちは思ったより活発で積極的だった。

（９） 北俊夫「自国文化の理解」大津和子・溝上泰編『国際理解－重要用語300の基礎知識』明治図書、2000年、62ページ。

(10) 中村水名子「アジアに目を向けた国際理解学習」、同上、37ページ。

(11) 江原裕美「海外修学旅行」原田種雄・赤堀侃司編『国際理解教育のキーワード』有斐閣、1992年、78ページ。

(12) 国際理解教育に大きく関係する地理学においては、雑誌『地理』第48巻第3号（2003年）に特集韓国の深層として、＊山と海に見る韓国の世界観（伊藤亜人)、＊韓国の村と町（本田洋)、＊韓国の風水－地形を「気」で読む（渋谷鎮明)、＊民俗マウルの世界－慶州、良洞マウルでのフィールドワーク（山元貴継)、＊韓国社会とキリスト教（秀村研二)、＊今に残る儒教文化（山田正浩）といった論文が所収されている。

(13) 継続性を保つための一環として三宅ゼミでは次のような事業を行った。2010年1月6日から11日まで前年9月の合同セミナーに参加した海洋大学生の中から英語が堪能な学生を二人選びだし、北九州に招待した。今回のセミナーに関する英文報告書を共同で作成するためである。それ以外の時間には三宅ゼミ1年生がアテンドをして北九州市、太宰府などを案内した。

（本学法学部教授）